医療系学部における多職種連携教育（IPE）の取り組み

ー蔵本キャンパスすべての1年生による合同ワークショップー

岩田　貴[1)]　長宗雅美[1)]　辻　暁子[1)]　福富美紀[1)]　石田加寿子[1)]　藤本晶子[1)]　赤池雅史[1)]

1)徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 医療教育開発センター

1. 背景

徳島大学では、医療人を目指す学生が相互理解を深め、将来ともに円滑なチーム医療を行える基盤形成として、2007年より医療系1年生による複数学科共同の「医療入門ワークショップ」を開催している。第5回を迎えた今年度は東日本大震災を目の当たりにして、医療人を目指す学生として何をなすべきか、今後の学生生活で何を学び、習得していくべきかを、他学部・他学科の学生と共に考え、お互いから学ぶ事を通して、医療人としてのプロフェッショナリズムの醸成をはかる事を目的として、KJ法を用いたワークショップを行った。甚大な自然災害をテーマとしたワークにおける医療系学部1年生の学びについて、終了後のアンケートおよび作成したプロダクトより検討し、報告する。

2. 対象

蔵本キャンパス医学部、歯学部、薬学部1年生全員（表1）

表1　参加者所属学科内訳（415名：全体の92%）

学部	学科（専攻）	参加人数	チューター
医学部	医学科	114	6
	栄養学科	50	3
	保健学科（看護）	67	5
	保健学科（放射）	37	2
	保健学科（検査）	17	2
歯学部	歯学科	36	2
	口腔保健学科	15	2
薬学部		79	5
医療教育開発センター			3
合計		**415**	**30**

3. 方法

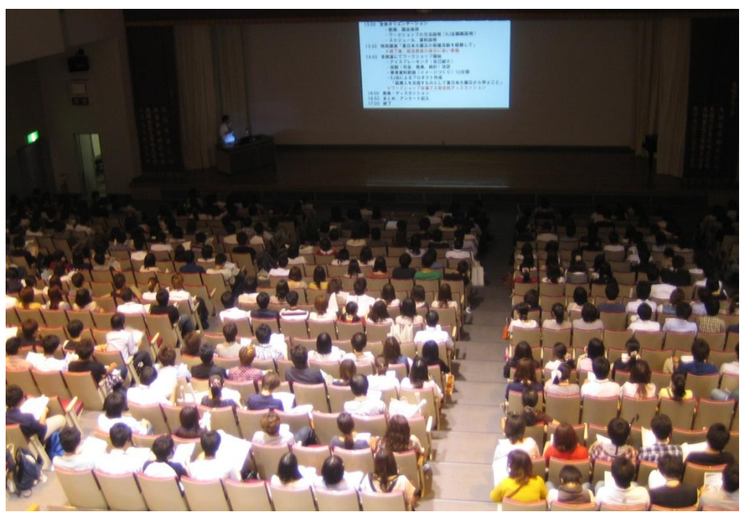
下記のスケジュールでワークを実施し、参加者による事後アンケートを行った。

①全体オリエンテーションの後、東日本大震災のボランティア活動に参加した教員、学生の講演を聴講した。

演題「東日本大震災の救援活動を経験して」

演者6名（敬称略）

1 医師：奥田奈緒（救急集中治療部　特任助教）
2 薬剤師：中村敏己（薬剤部薬品安全対策室長）
3 看護師：川西智恵美（保健学科看護技術分野　教授）
4 医学部生：小渕香織（医学科3年生）
5 薬学部生：稲山義高（薬学部3年生）
6 臨床心理士：内海千種（総合科学部　臨床心理学講師）



黙祷、全体オリエンテーション、講演（大塚講堂）

②複数学科混合のグループ（6-7名）に分かれ**「医療人を目指すものとして東日本大震災から学ぶこと」**をテーマに、KJ法を用いてプロダクトを作成し、4グループ内で発表をした。2グループに1名の教員あるいは大学院生がチューターとして参加し、ワークを支援した。

KJ法によるグループワーク

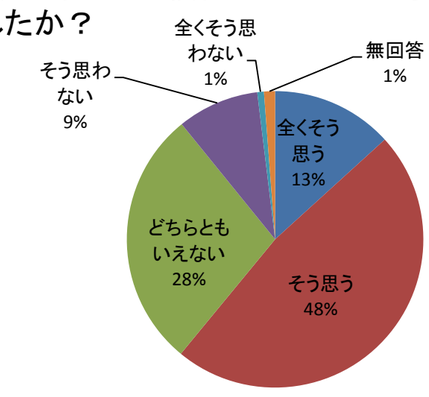
成果発表（付箋の色を学科別にしている）

③終了時、学生・チューターにアンケートを実施した。

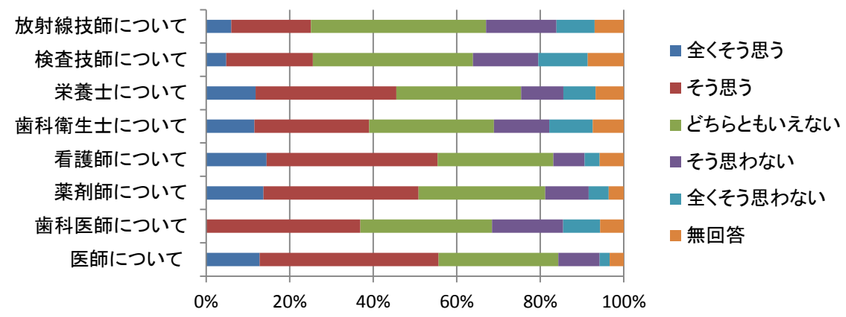
4. 結果

＜学生アンケート結果＞

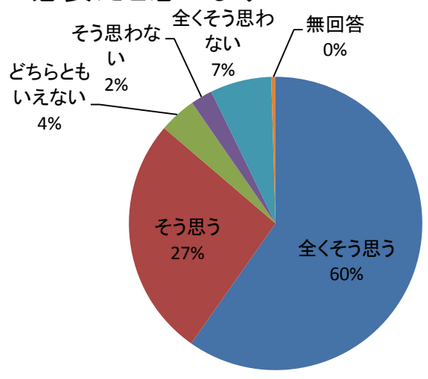
Q1　あなたは積極的にワークに参加できましたか？



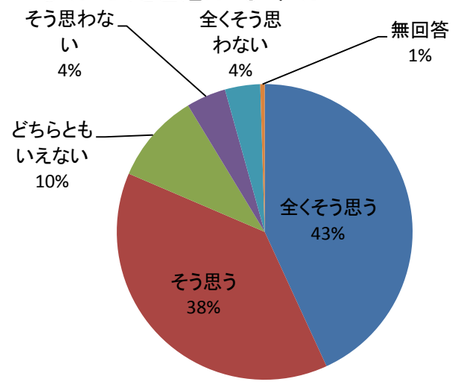
Q2　それぞれの職種の特徴や役割について、新たな発見・気づきがありましたか？



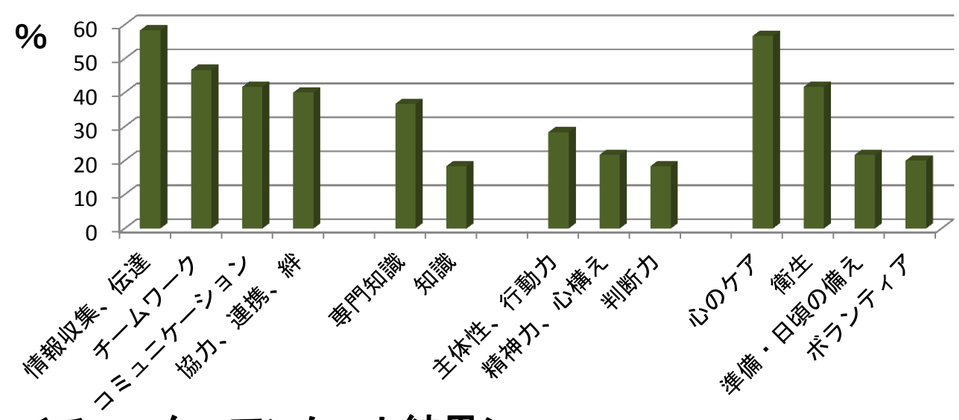
Q3　学部横断的なチーム医療は必要だと思いますか？



Q4　全体を通してこのワークショップはよかったと思いますか？

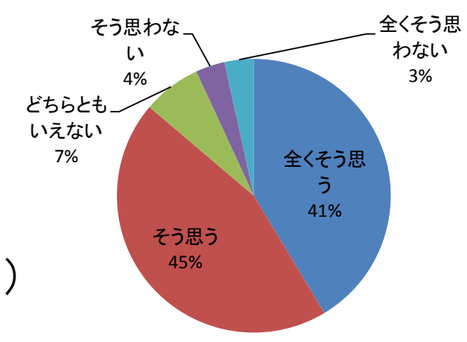


＜プロダクトに多く見られた項目＞

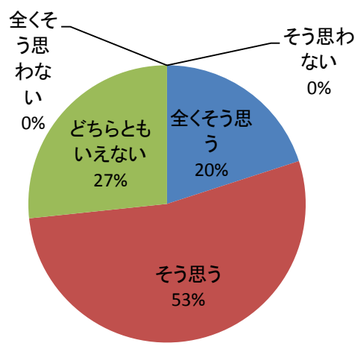


＜チューターアンケート結果＞

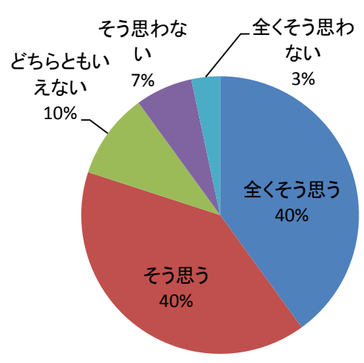
Q1　このような形式WSが学生の為になると思いますか？



Q2　このWSに参加することが自分自身の為になると思いますか？



Q3　来年以降もこのような合同企画を 行った方が良いと思いますか？



5. 考察

今年度は蔵本キャンパスの1年生全員を対象にワークを行った。参加学生は全体の92%におよび、5回目となる合同ワークショップが蔵本キャンパスに根付きつつあると思われた。今回は3月に発生した東日本大震災をテーマとして取り上げた。支援の実態を身近に捉えられるよう、支援活動に参加経験のある徳島大学教員と学生を演者とし体験を聞いた後にワークを行った。テーマが大きく、またワークの時間が約90分と短かった為、内容の充実が不十分であることが予想されたが、終了時アンケートによれば，約60%の学生が積極的に参加できたと答え、学部横断的にチーム医療を学ぶ事については80%以上の学生が肯定的にとらえていた。様々な職種の体験談を基に学習を進める中で、各職種に対する何らかの気づきや発見を得た学生は約半数と思われた。完成したプロダクトには「情報」「コミュニケーション」「チーム医療」「連携」といった協力につながる語句とともに、「専門性」「知識」といった語句も多くみられ、それぞれの立場で学ぶべきことも考えられているようであった。全体を通して「良かった」と答えている学生は約80%おり、実際現場をイメージした学習は効果的であったと思われた。チューターも肯定的な意見が大部分を占めていた。しかしその一方で、「多大な労力を要すること」「時間的余裕がないこと」等を危惧する意見もみられ、今後の工夫を要するところであろう。

6. まとめ

未曾有の大災害を題材とし、自分は何をなすべきかという思いは医療の原点であり、それを語り合い、議論する事は、医療人を目指す学生にとってプロフェッショナリズムの醸成の土台となりえる。医療に関連する具体的なテーマを取り上げ、学部学科横断的に学生が議論する場を設けることは、職種間連携教育として効果的である。